

■龍安寺

1. 概要

龍安寺(りょうあんじ)は、臨済宗妙心寺派の寺院。石庭で知られる。本尊は釈迦如来、開基(創建者)は細川勝元、開山(初代住職)は義天玄承である。「古都京都の文化財」として世界遺産に登録されている。

2. 歴史

「石庭」として知られる枯山水の方丈庭園で有名な龍安寺は、室町幕府の管領、守護大名で、応仁の乱の東軍総帥でもあった細川勝元が宝徳2年(1450年)に創建した禅寺。衣笠山麓に位置する龍安寺一円は、永観元年(984年)に建立された円融天皇の御願寺である円融寺の境内地であった。

円融寺は徐々に衰退し、平安時代末には藤原北家の流れを汲む徳大寺実能が同地に山荘を建立した。この山荘を細川勝元が譲り受け寺地とし、初代住職として妙心寺8世(5祖)住持の義天玄承(玄詔)を迎えた。義天玄承は師の日峰宗舜を開山に勧請し、自らは創建開山となった。

龍安寺は、開基細川勝元らと守護大名山名持豊(宗全)らが争った応仁の乱(1467-1477年)によって焼失するが、勝元の子の細川政元と4世住持・特芳禅傑によって、明応8年(1499年)に再興された。寺では特芳を中興開山と称している。その後、織田信長、豊臣秀吉らから寺領を付与されている。

絵入りの名所案内書(現代の旅行ガイドブックに相当)である『都名所図会』(安永9年(1780年)刊行)を見ると、当時、龍安寺の鏡容池はオシドリの名所として知られており、今日有名な石庭よりも、池を中心とした池泉回遊式庭園の方が有名であった。

寛政9年(1797年)に京都奉行所へ提出された古地図には23か寺の塔頭があったが、寛政9年(1797年)の火災で方丈、仏殿など主要伽藍が焼失したため、塔頭の西源院の方丈を移築して龍安寺の方丈(本堂)とし、現在にいたっている。

その後、明治初期の廃仏毀釈によって衰退するが、イギリスのエリザベス2世が1975年に日本を公式訪問した際、龍安寺の拝観を希望し、石庭を絶賛したことが海外のマスメディアでも報道された。

そのため、昨今では世界各地での日本のZEN(禅)ブームと相俟って、世界的にも知られるようになった。

3. 境内

(1) 鏡容池

寺の南側には広大な鏡容池があり、周囲は池泉回遊式庭園になっており、年間を通じて四季それぞれの花を楽しめる(国の名勝)。境内北側には庫裡、方丈、仏殿などが建ち、これらの西側には「西の庭」がある。西の庭には開基細川勝元の木像を祀る細川廟がある。有名な石庭は方丈南側にある。

(2) 方丈(重要文化財) -

元の方丈が寛政9年(1799年)の火災で失われた後、塔頭の西源院方丈を移築したもので、慶長11年(1606年)の建立である。本来ここには狩野派の手による襖絵があったが、それらは明治初期の廃仏毀釈の影響により、寺から出て散逸してしまった。現在のものは昭和30年頃に皴月鶴翁によって描かれたものである。

(3) 方丈庭園(石庭)

方丈庭園(史跡・特別名勝) - いわゆる「龍安寺の石庭」である。幅 25 メートル、奥行 10 メートルほどの空間に白砂を敷き詰め、東から 5 個、2 個、3 個、2 個、3 個、合わせて 15 個の大小の石を配置する。

これらの石は 3 種類に大別できる。寺伝では、室町末期(1500 年頃)特芳禅傑らの優れた禅僧によって作庭されたと伝えられるが、作庭者、作庭時期、意図ともに諸説あって定かではない。

堀ぎわの細長い石には「小太郎・口二郎」と刻まれており、作庭に関わった人物と推測されるが、憶測の域をでるものではない。

この庭は石の配置から「虎の子渡しの庭」や「七五三の庭」の別称がある。

「虎の子渡し」とは、虎は、3 匹の子供がいると、そのうち 1 匹は必ずどう猛で、子虎だけで放っておくと、そのどう猛な子虎が他の子虎を食ってしまうという。

そこで、母虎が 3 匹の虎を連れて大河を渡る時は次のようにする。母虎はまず、どう猛な子虎を先に向こう岸に渡してから、いったん引き返す。

次に、残った 2 匹のうち 1 匹を連れて向こう岸に行くと、今度は、どう猛な子虎だけを連れて、ふたたび元の岸に戻る。その次に、3 匹目の子虎を連れて向こう岸へ渡る。

この時点で元の岸にはどう猛な子虎 1 匹だけが残っているので、母虎は最後にこれを連れて向こう岸へ渡る、という中国の説話(虎、彪を引いて水を渡る)に基づくものである。

また、「七五三の庭」とは、東から 5、2、3、2、3 の 5 群で構成される石組を、5 と 2 で七石、3 と 2 で五石、そして 3 で三石と、七・五・三の 3 群とも見られることによる。古来より奇数は陽数、すなわちおめでたい数とされ、その真ん中の数字をとったものである。

この石庭は、どの位置から眺めても必ずどこかの 1 つの石が見えないように配置されていることでも有名である。

4. 文化財

(1) 知足の蹲踞(つくばい)

茶室蔵六庵の露地にある。蹲踞は茶室に入る前に手や口を清めるための手水鉢のこと。水戸藩主徳川光圀公の寄進によるものと伝えられている。

一見「五・隹・疋(但し、上の横棒がない)・矢」と読めるが、水溜めに穿った中心の正方形を漢字部首の「口」と見れば「吾れ唯だ足ることを知る」となる。

「知足のものは貧しいといえども富めり、不知足のものは富めりといえども貧し」という禅の格言を謎解き風に図案化したものである。

5. エリザベス女王、

1975年に拝観。(43年前)。このエリザベス女王の拝観後、この龍安寺がポピュラーな観光寺院となる。